

検証 「岩村田式」 土器

― 箱清水式土器分布圏内における大中小地域型式の設定 ―

小山 岳夫

要旨

藤森栄一による「岩村田期（式）」土器設定の根拠となったと考えられる昭和5（1930）年6月19日に発掘された神津猛収集資料を検証した結果、「岩村田式」土器は基本形を「箱清水式」と同じながら、「箱清水式」成立段階からの文様壺矢羽状文、「栗林式」からの文様甕横羽状文などを古墳時代の始まりまで継承することから、佐久盆地弥生後期の小地域型式として成立するという結論に至った。今後、佐久盆地のみならず各盆地の土器様相を分析して小地域型式を設定できうるかも予測した。

小地域型式を包摂する範囲については、長野・山梨県域を「箱清水式」、群馬県と埼玉・神奈川県・東京都の一部を「樽式」と規定して中地域型式とした。

さらに「箱清水式」土器は長野盆地南部を起点として、飯山中野・上田・松本・佐久盆地さらには甲府盆地、群馬県へ波及あるいは影響を及ぼしたと考えられ、これらの地域をくくる分布圏を包括する大地域型式とするに相応しいと判断した。

1 はじめに

長野県の弥生時代後期に位置づけられる「箱清水式」土器は、中部高地型櫛描文（笹沢 1978）を施文する土器で長野県北東部を縦貫する千曲川流域の長野盆地・上田盆地・佐久盆地を1次分布圏として、山梨県甲府盆地、群馬県、松本盆地北部、後期後半に至っては松本盆地南部にも2次分布圏を形成する⁽¹⁾。

昭和41（1966）年神村透によって千曲川流域の長野盆地・上田盆地・佐久盆地、犀川流域の松本盆地の後期弥生土器が「箱清水式」土器という名称で統一される（神村 1966）以前は、佐久市周辺については「岩村田期（式）」、飯山市周辺については桐原健が「尾崎式」とも呼んでいたが、神村は大きな違いがないことを理由に「箱清水式」と総称したことにより、以後「箱清水式」以外は学史から姿を消した。

しかし、統一から50年以上経過した現在、当該期の各地域の土器資料は膨大になり、盆地単位の小地域の特徴が明確になってきた。

笹沢浩は、壺・甕の特徴から「善光寺平型」「飯山型」「上田型」などと「箱清水式」土器にも地域的な違いがあることを示唆し、「飯山型」とした土器が善光寺平を挟んで飯山と佐久盆地に分布する現象に注目した（笹沢 1979）。

中島庄一は飯山中野市域の長野盆地北部の後期中葉の壺を長野盆地南部と比べて受口状に立ち上がる点、T字文下に波状文を加える頸部文様が多いことなどの違いから「尾崎式？」を再検討する必要性を提起している（中島 1999）。

佐久盆地の後期弥生土器を分析した私は、壺の矢羽状文、甕の横羽状文を多用する土器群を「佐久系箱清水式」と仮称して長野盆地南部の「箱清水式」と違いがあることを示した（小山 2017a）。

私は今まで「箱清水式」と一括りにしていた長野県北東部から中部にかけて各地域に分布する後期

弥生土器群の特徴を明確にして、盆地毎に小地域型式名を冠する必要に迫られていると考える。先に私が仮称した「佐久系箱清水式」については、長ったらしい煩わしさが否めず、「系」という字はたどり着いた先を表しているとの誤解を招きやすく小地域型式を示す名称としては相応しくない。佐久地域を端的に表す小地域型式名が必要である。

本稿では、まず学史上に登場する「岩村田式」土器を再検証して、佐久盆地を象徴する小地域型式名とするに相応しいかを検証する。

註1 「箱清水式」1次分布圏とは？千曲川流域では他地域に比べて壺の赤色塗彩が著しい。これは長野市松原遺跡の裏山にベンガラ的一大鉱脈があり、そこから豊富に生産される赤色顔料が千曲川流域には十分に行き渡った結果と私は見ている。また、1次分布圏では後期中葉以降、壺の胴下部に明確な稜を持ち、稜以下はこけるという製作技法が大きくかわる器形の特徴がある。千曲川流域以外の2次分布圏の「箱清水式」はこの規範から外れ稜が不明確あるいは稜がない器形となる。

神村透 1966「4中部 二中部高地」『日本の考古学Ⅲ 弥生時代』

笹沢 浩 1986「箱清水式土器の文化圏と小地域」『歴史手帖』14巻2号 善光寺平を避けた飯山―佐久間の人の移動を想定

小山 岳夫 2017a「甲府盆地一円と長野県佐久盆地・茅野地域の弥生時代後期の繋がり」『山梨県考古学協会誌』第25号

中島庄一 1999「飯山・中野地方における弥生中期後半から後期の編年について」『99 シンポジウム長野県の弥生土器編年』

2 「岩村田式」土器の学史への登場と退場

昭和11(1936)年藤森栄一によって設定された「岩村田期(式)」という土器は櫛目文の時期、弥生土器の中では2番目に新しい時期に位置付けられた(藤森 1936)。「岩村田期(式)」の学史への登場である。

弥生土器で一番新しいのは箱清水期(式)で、桐原健によればこれは弥生土器の中に土師器が混じっていたために位置づけられたのだという。

藤森の「岩村田期(式)」設定以前に、神津猛は昭和5(1930)年6月19日に岩村田駅舎近くで発掘調査を行い(神津 1936)、岩村田内西浦(現在の子ども未来館近く)でも収集を行って、多くの土器を所蔵していた。これらの所蔵品の一部が昭和9(1934)年八幡一郎著の『北佐久郡の考古学的調査』で「先史時代後期遺物 弥生式土器の第二類」として紹介されている(八幡 1934)。

昭和41(1966)年神村透は前述のとおり、『日本の考古学Ⅲ 弥生時代』で「尾崎式」を廃し、「箱清水式」への統一作業を行った(神村 1966)。この際、「岩村田式」については触れられていないが、以後「岩村田式」を使用した者はなく、「岩村田式」は設定後30年、自然消滅という形で学史から姿を消した。

なお、昭和42(1967)年桐原健は安源寺遺跡報告で、神村の「箱清水式」統一の主張に従いつつも、安源寺2類と分類した土器に「かつては尾崎式とも呼称した」と未練を残した発言をしている(桐原 1967)。

また、昭和54(1979)年から佐久に帰省し、発掘調査に参加していた当時学生の際は、発掘の際に赤い土器が出土するたびに佐久の考古学を支えた武藤金・森泉定勝・井上行雄・三石延男氏(いずれ

も故人)の調査員諸氏から「「岩村田式」！」というツブヤキを聞いていた。学史から去ったとはいえ、佐久地域の考古学者にとって「岩村田式」は忘れがたい存在だったのである。

私が弥生土器研究にのめりこむきっかけになったのは、昭和 53 (1979)年から数年間の故合田芳正氏との邂逅であった。当時の私は日本農耕文化の生成に興味を持ち始めていたので、合田氏に「夜臼式」「板付式」など教わっていた。「夜臼」は「ゆうす」と読むのだと教えられたことは今でも印象深い。これにとどまらず、合田氏は私が長野県出身であるというだけで「箱清水式」を研究しているものと決めつけ「箱清水はどこから来たのかな？」などの返答のしようがない難題を投げかけて私を苦しめていた。屈折した精神の私は、いつしか地元の「箱清水式」土器の研究を始めていた(小山 2017b)。その精神の深層には佐久の古参調査員四氏との出会いも少なからず作用していた。

藤森栄一 1936「信濃の弥生式土器と弥生式石器」『考古学』第7巻第7号

神津猛 1936「「岩村田の弥生遺跡」『信濃』Ⅰ・5-8

八幡一郎 1934「弥生式土器の型式分類」『北佐久郡の考古学的調査』106~118P

桐原 健 1967「土坑内出土遺物」『海戸・安源寺』長野県考古学会

小山岳夫 2017b「弥生時代の炉 再々考」『長野県考古学会誌』156号 80P

3 「岩村田期(式)」の実相

藤森は岩村田期(式)設定に際し、土器を図示しなかったため、いったい何処の資料を用いたのかについても謎のままであった。

しかし、近年私は桐原健から「藤森は神津と交流があったから、神津が昭和5年前後に発掘・収集した資料をみて昭和11(1936)年に岩村田期(式)を設定した可能性が高い。」との証言を聞き出した。

このことを確認するため、私は、平成31年3月13・24日長野県立歴史館に寄贈されていた「岩村田周辺」と記された神津猛所蔵資料(以下「神津猛資料」という。)」の調査を実施した。これらの一部は八幡一郎著『北佐久郡の考古学的調査』の挿図・図版にも掲載されていた。また、佐久市岩村田に所在する佐久ホテルにも神津猛が所蔵したとされる資料があったので同年3月28日に調査を実施した。

神津猛資料の概要

壺は頸部文様にバリエティがある。図1-1・2は私が「佐久系箱清水式」と仮称するきっかけになった鋭い鋭利な刃物で切りつけたような工具で施文した矢羽状文の無彩壺である。1-3のような赤彩壺もある。

1本一単位のT字文をもつ壺は、無彩1-4と赤彩品1-5がある。頸部に2本一単位縦スリットのT字文をもつ壺1-6、簾状文下に波状文をもつ壺1-7は赤彩される。図示しなかったが赤彩される櫛描横羽状文の壺もある。以上の文様の特徴と、スリムで球胴化する器形は見当たらない胴部の特徴から佐久Ⅲ期新段階相当である(小山 2014)。

1-8の甕は、図2の甕は八幡論文図版六の5にも掲載された。口縁~胴部にかけて弓状に外反する器形で、口縁から胴部中位にかけて櫛描横羽状文を施したのち、頸部に4連止め簾状文、簾状文の下位に円形浮文を施す。横羽状文を構成する斜状文は口縁~胴部にかけて上から下の順序で7段施文し、一帯は反時計回りに施されている。円形浮文は欠き、簾状文が止まる回数も異なるがそれ以外は同様



図1 神津猛資料の概要

な施文の1-9・10、簾状文がない1-11もある。以上が佐久盆地を象徴する横羽状文を施す甕の概要である。

櫛描波状文を施す甕の器形は、横羽状文の甕と同様である。1-12のように頸部に簾状文を施したのち、口縁部については下から上へ、胴部については上から下へ数帯の櫛描き波状文を施すものが主流である。この施文パターンは波状文施文甕の中でも古い要素と考えられるものである（青木 1998）。

口縁部に横羽状文、胴部は波状文を施す1-13もある。

以上の甕は、おおむね佐久Ⅲ期新段階に位置付けられる。
赤色塗彩高環1-14は、Ⅲ期新段階～Ⅳ期の可能性が高い。

総じて、神津猛収集の岩村田駅周辺資料は、現在、佐久Ⅲ期新段階を中心とした資料が見受けられ、後期Ⅰ・Ⅱ期はなく、Ⅳ期は少なかった。

八幡論文中には、図3中の第六図版2などのように「栗林式」も混在している。これが藤森の「岩村田期（式）」を櫛目文土器の中でも古く位置づけさせる原因となったのではないかと。

佐久ホテル所蔵資料の図2（八幡論文第七図版の5）、図3（八幡論文第五十八図7）の壺は、現オーナーの篠澤氏によれば、同ホテル敷地内から掘り出されたという説もあるが定かでない。頸部中位以上を欠損する壺で、胴部中位以上は赤色塗彩されているが、2次焼成を受けたため、いぼされたような灰色の色調である。頸部中位には櫛描簾状文、下位には櫛描直線文が施されている。器形は球胴化傾向が著しく、後期Ⅳ期～古墳時代Ⅰ期に位置づけられる。

小山岳夫 2014 「佐久地域後期弥生土器編年と北一本柳遺跡の年代」『佐久考古通信 113』佐久考古学会

小山岳夫 2016 「前方後円墳未築造地域における弥生から古墳時代前期の集落」『専修考古学』第15号

青木一男 1998 「第4章第1節中部高地型櫛描文系土器群の理解 第2節古墳時代前期の土器の理解」『松原遺跡 弥生・総論6』207p - 208p (財長野県埋蔵文化財センター)

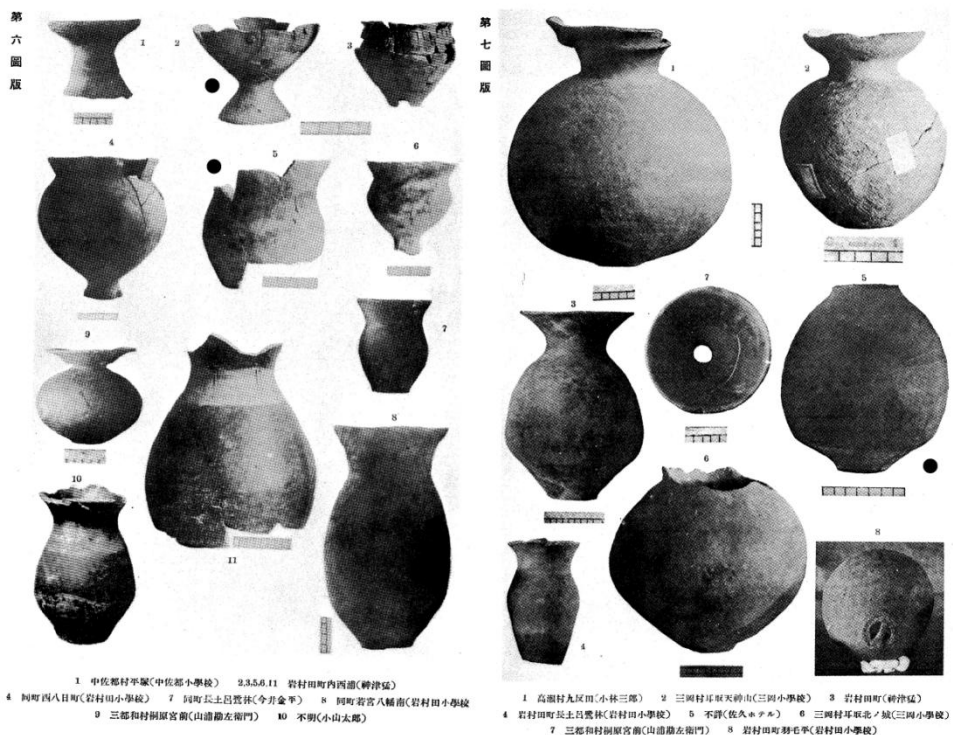
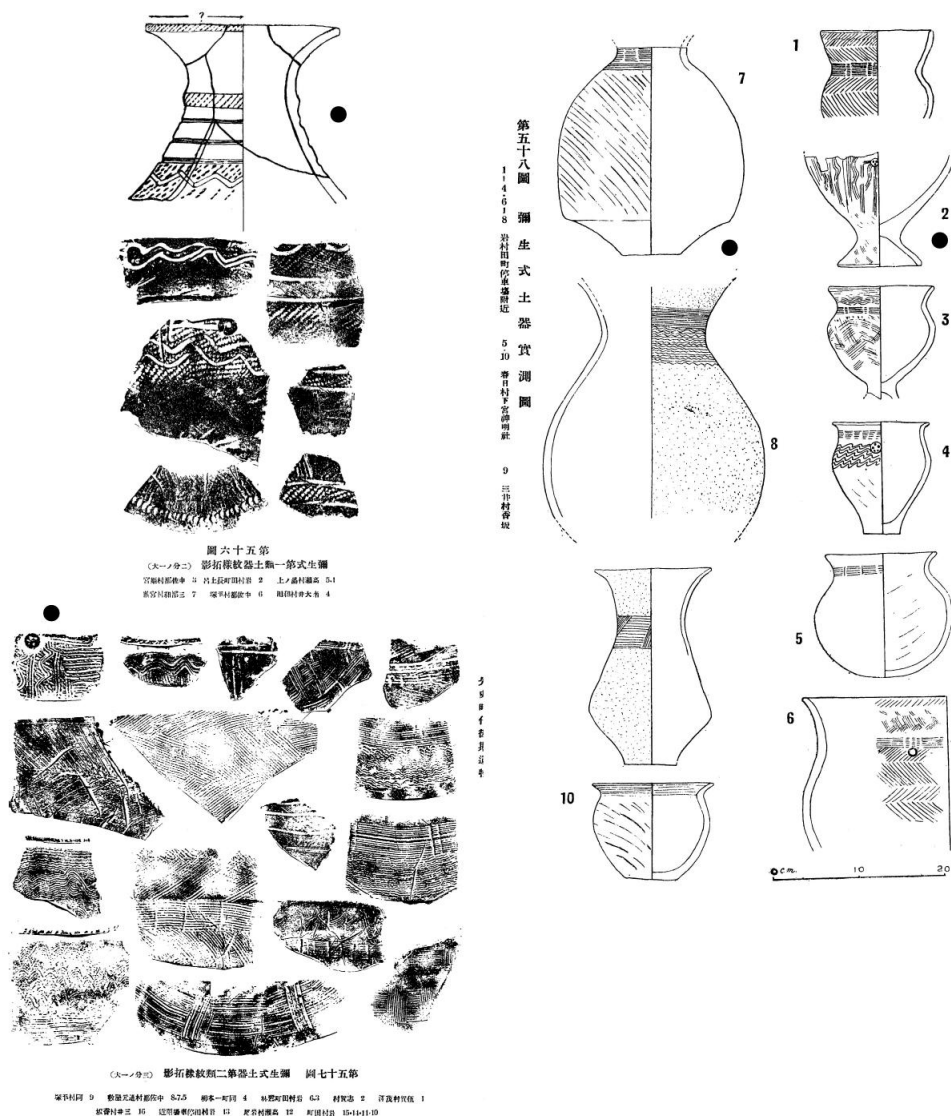


図2 八幡論文に見いだせる神津猛資料と佐久ホテル資料1 (該当部分に● 八幡 1934より転載)



私は昭和 11（1936）年藤森栄一の「岩村田期（式）」土器の設定内容は、前項で概説した神津猛資料が有力な根拠になっていたと考える。

神津猛資料中の壺には頸部の文様として矢羽状文が確実に存在した。八幡論文の図・拓本中にも確認できるとおり、数多くの横羽状文の甕も存在している。

「岩村田期（式）」設定の根拠となったと考えられる神津猛資料は、筆者が仮称している「佐久系箱清水式」の内容と合致する。平成 27（2016）年仮設定の「佐久系箱清水式」と昭和 11（1936）年「岩村田期（式）」はイコールである。佐久盆地を象徴する小地域型式として「岩村田式」を冠するのは相応と考える。

設定から 80 年、消滅から 53 年の歳月を経た現在、私はここに「岩村田式」土器の復活を提起する。

5 「岩村田式」の基準資料

「岩村田式」の型式内容

ここで改めて「岩村田式」の型式内容について整理しておきたい。

器種構成は壺・無頸壺・甕・鉢・高坏・蓋・甑などからなる。壺・無頸壺・高坏は赤色塗彩される頻度が高い。

後期中葉以降からの壺は胴部下位の稜以下がこける千曲川流域共通の「箱清水式」の代名詞的な器形を保持する。壺の頸部文様は後期中葉から櫛描文、特に櫛描 T 字文に統一される長野盆地の「箱清水式」式とは対照的に鋭利な金属で切りつけたようなヘラ描文を後期前葉から後葉ひいては古墳時代初頭まで継承する。ヘラ描文の種類は「矢羽状文」を主体として後期前～中葉までは「斜格子目文」もある。

甕は櫛描波状文とともに、「栗林式」への回帰現象とも見紛うような櫛描横羽状文が後期中葉から多用され古墳時代初頭まで継承される。遺跡によっては横羽状文が多数を占める場合もある。

壺甕ともに以上のような古い文様が弥生後期後葉、古墳時代初頭にまで残存したため、過去において佐久盆地出土の後期弥生土器は一概に古くみられる誤認があった。

なお、岩村田式の存続時期は私の従来の弥生後期編年佐久 I～IV 期（小山 2014）のすべて、「岩村田式」の特徴が表出する前の萌芽期もすべてを該当させて考えたい。

基準資料（図 4・5）

後期中葉古段階では「岩村田式」土器の基準資料として、佐久市周防畑遺跡群（上田真 2014）2・17・51・523・801 号住居址を当てたい。壺・甕・高坏・鉢などの器種が揃っている良好な一括資料がないため寄せ集め資料である。壺の矢羽状文、甕の横羽状文という佐久盆地特有の文様が出揃う時期で、壺頸部文様については、ヘラ描斜格子文、櫛描横羽状文も特徴的である（図 4）。

神津猛資料と同時期後期中葉新段階の基準資料としては、銅釧を装着した埋葬遺体が出土したことで著名な佐久市上直路遺跡 1 号住居址出土資料（佐久市教委 1998）が該当する（図 5）。

上田真 2014 『佐久市周防畑遺跡群 中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3 一佐久市内 3 一』長野県埋蔵文化財センター

佐久市教育委員会 1998 「上直路遺跡調査報告書」『佐久市埋蔵文化財文化財年報 6』

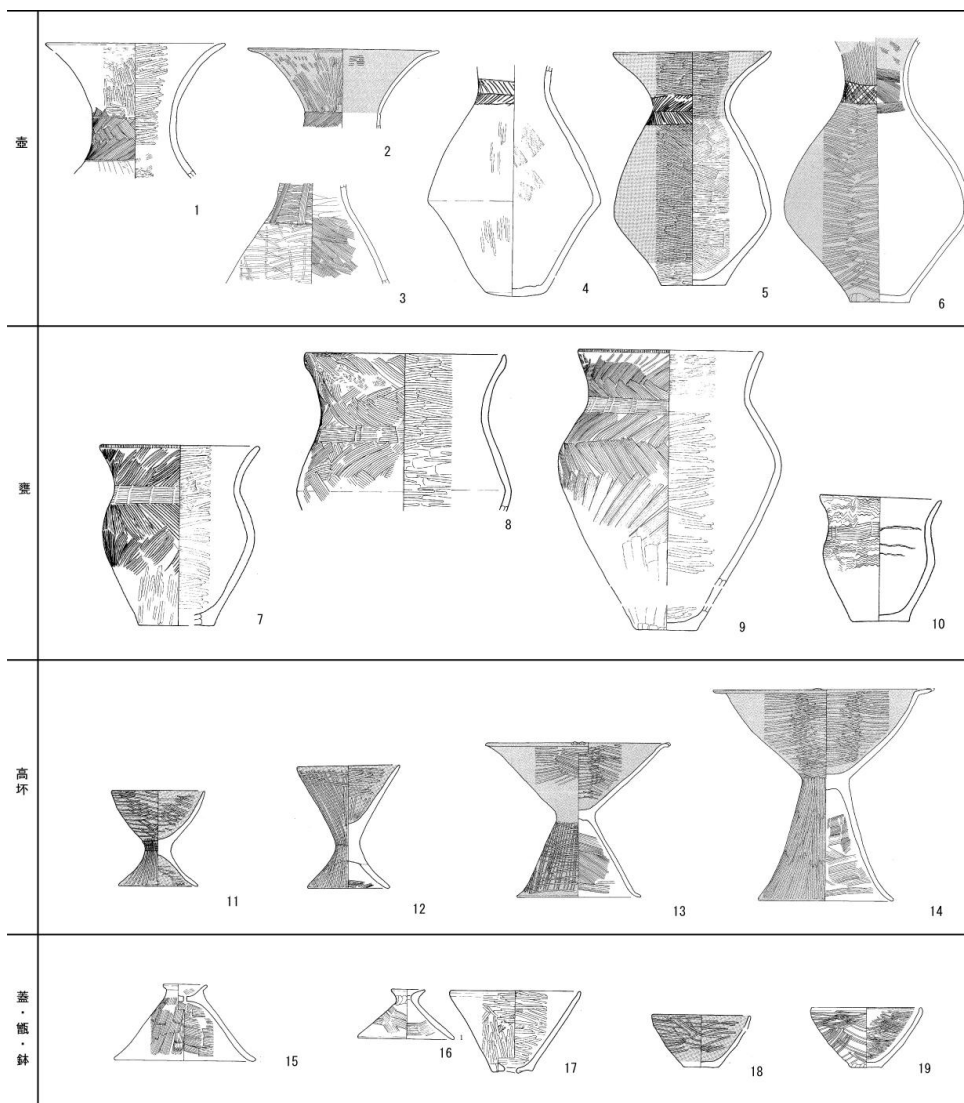


図4 佐久市周防畑遺跡群から抽出した「岩村田式」土器のモデル資料

(2・4・7・9・10・15・18—2号住居址、3—21号住居址、13—17号住居址、11・12・19—44号住居址、14—51号住居址、16・17—51号住居址、1・5—520号住居址、6—523号住居址)

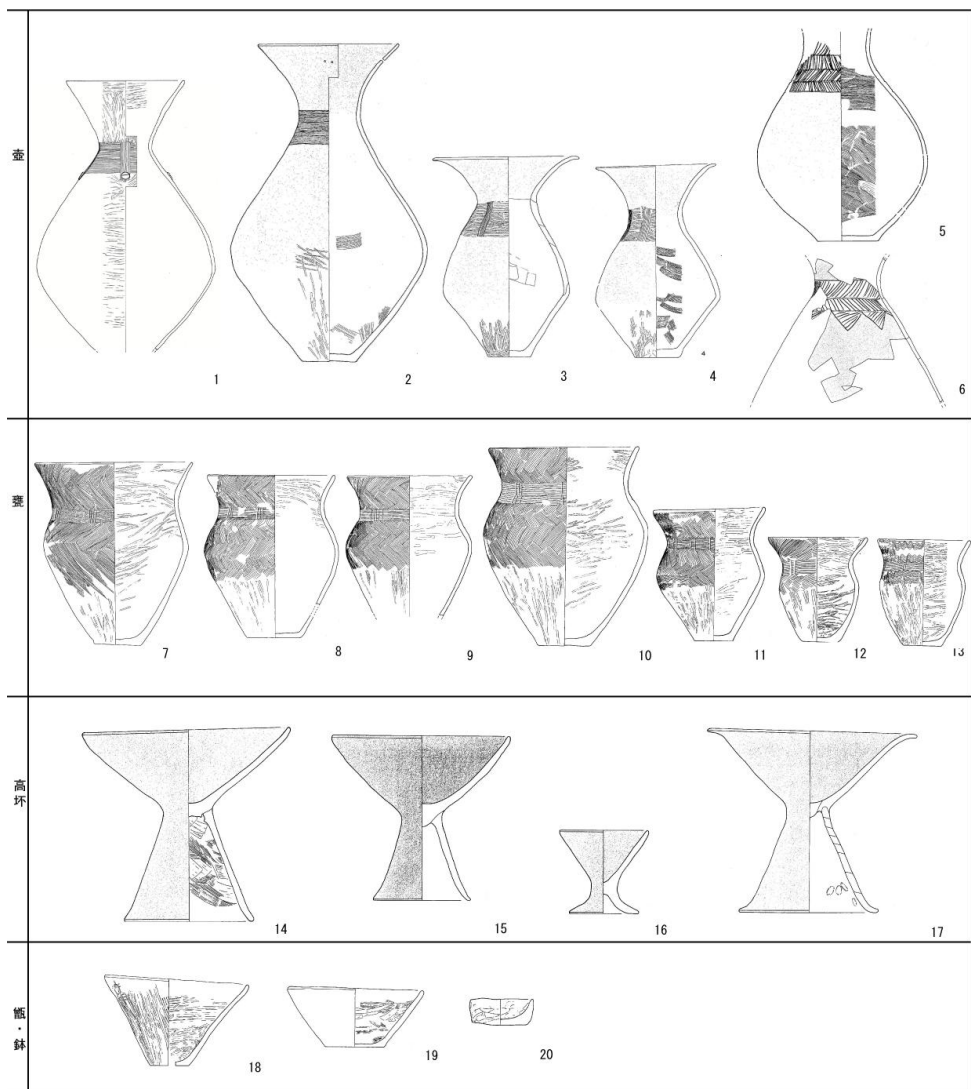


図5 佐久市上直路遺跡1号住居址の「岩村田式」土器のモデル資料（後期）中葉新相

6 課題として「箱清水式」大中小地域型式の設定予測（図6・7）

資料不足の地域があるため、土器様相をとらえにくい状況にあり、全体像を提示するのは時期尚早との批判は覚悟のうえで、以下に長野・群馬・埼玉・（一部東京・神奈川）・山梨県の中部高地型櫛描文土器を共有する大中小地域型式の設定予測を試みる。

なお、各地域の編年の併行関係について表1に取りまとめた。

長野県内

「箱清水式」は後期前葉から長野盆地南部を起点として、飯山中野・上田・佐久・松本盆地へ波及したことは明らかであり、長野県内をくくる中地域型式として相応しい。また、「箱清水式」は後期

表1 長野県弥生時代後期土器編年併行関係表(長野県各地と群馬・山梨・畿内を対比)

[illegible]

中部高地型櫛描文土器分布圏内にあって嚙矢をなすものであり、後述するように群馬県の「樽式」の成立にも少なからず関与したものと考えられるため、「樽式」をも包摂した大地域型式の名を冠するのにも相応しいと考える。

本稿ではまず、佐久盆地における中地域型式「箱清水式」の小地域型式として「岩村田式」を設定した。今後、長野各盆地で小地域型式の存否を詳細に検討していく必要があるが、ここでは現状でできる限りの予察を試みる。

前述したように長野盆地北部飯山中野地域については、中島庄一が指摘する後期中葉に「尾崎式」が成立するかその是非を問う必要がある。

上田盆地は後期中葉から弥生後期社会が成立する。不思議なことにこの地域は「栗林式」不在、後期も前葉はなく、中葉新段階からようやく集落形成が始まり後葉に大規模集落が営まれる。土器様相は左岸地域が長野盆地南部の「箱清水式」、右岸地域は佐久盆地の「岩村田式」に類似し、混雑地帯的な様相を呈する。小林眞寿が指摘する後期後葉に上田盆地、佐久市西一本柳遺跡、群馬県渋川市有馬遺跡で特徴的にみられるT字文を頸部に施す甕（小林 2019）の評価が、上田盆地における小地

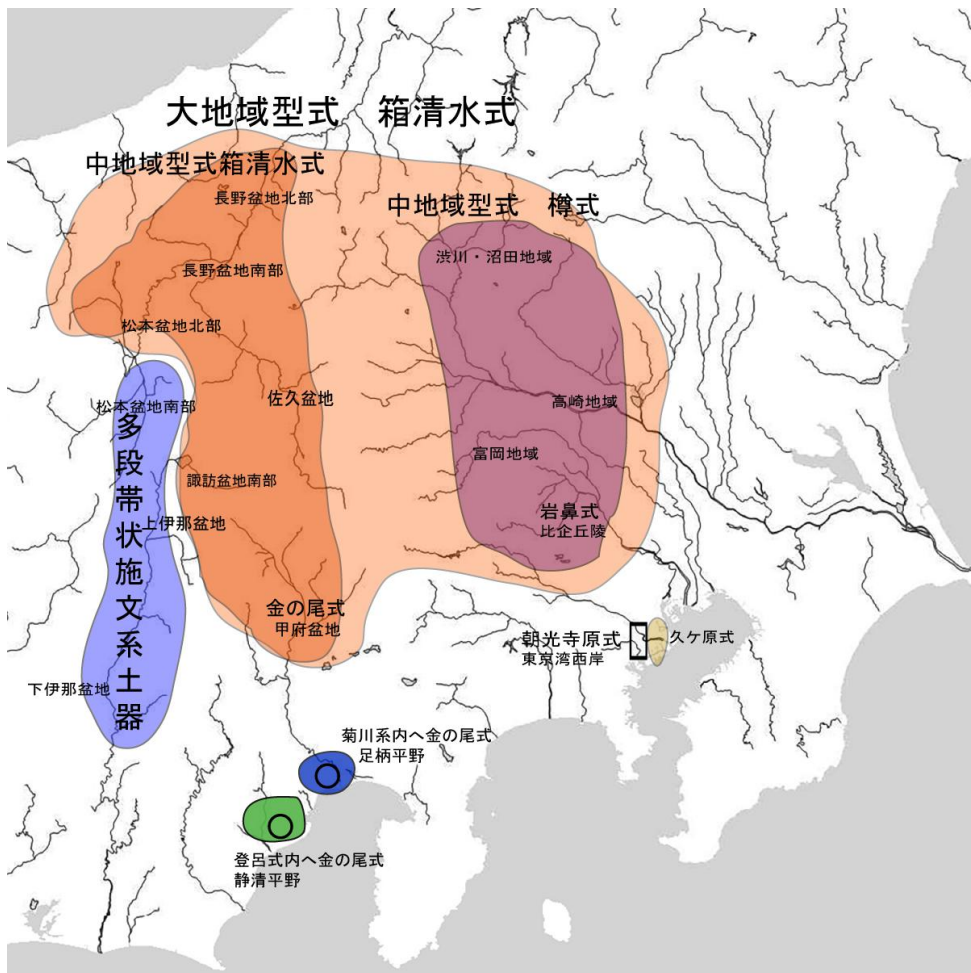


図6 弥生後期前葉の箱清水式の分布地域と他型式への移動状況

域型式設定の是非を左右するようにも思える。

松本盆地北部大町地域では後期前葉から「箱清水式」の進出が顕著であるが、壺胴部下半の稜が不明瞭であることのほかに小地域の特徴が見いだせるか、後期中葉から南信の「多段帯状施文系」から「箱清水式」に転換する松本盆地南部松本・塩尻地域は壺の赤彩傾向が一層低くなるように見える。これに加えて壺頸部J字文の評価が型式設定のカギとなる。

なお、図7では小地域型式が定まっていない状況を鑑みて曖昧ながら「箱清水系」と表記している。次に述べる茅野地域についても同様の理由から「岩村田系」としている。

諏訪盆地南部茅野地域は矢羽状文壺の存在から佐久盆地から「岩村田式」集団の移住が想定される。地域の特徴を見出して小地域型式を成立させるのか、後述する山梨県の「金の尾式」に併呑されるのか、小池岳志（小池 2010）も迷っているが今後慎重な検討が必要である。

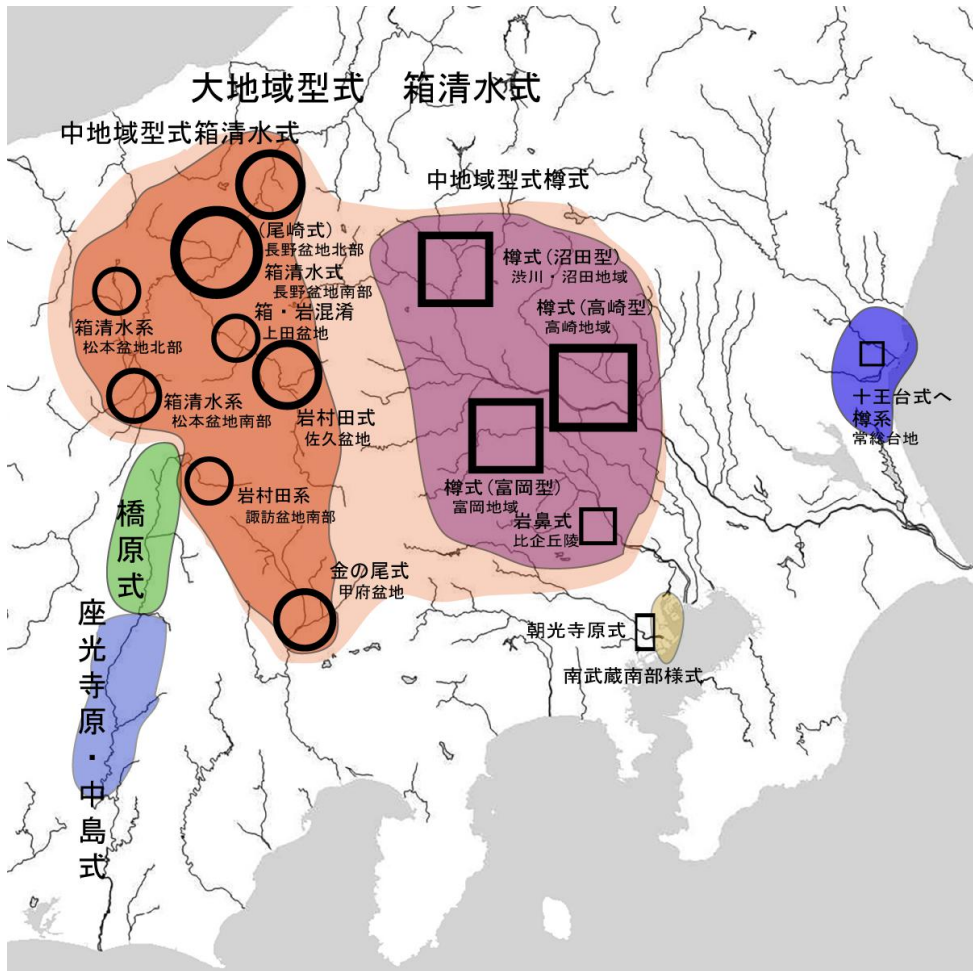


図7 後期中葉箱清水式の分布

他県の状況

群馬県に分布する「箱清水式」の兄弟型式とされる「樽式」については、前代の「栗林式」が群馬県にも存在し、そこから地域的发展を遂げている点からみて群馬県を括る中地域型式として位置付ける。

しかし、同じ中部高地型櫛描文を共有する点、前葉における「箱清水式」との類似、個性の表出が顕著な中葉における「箱清水式」との分化、後葉における「箱清水式」との類似の回帰と「箱清水式」への接近と離反を繰り返している（飯島 2015）点から巨視的には大地域型式「箱清水式」の範疇にあると考える。

位置関係から「樽式」と密接な関係にある埼玉県比企丘陵に分布する「岩鼻式」や「岩鼻式」部族集団の半族と目される東京湾西岸内陸部東京都・神奈川県に存する「朝光寺原式」（柿沼 2015）は、必然的に中地域型式「樽式」に包摂される。

大木紳一郎（大木 2019）が「樽式」の甕の違いに注目する「沼田型」「高崎型」「富岡型」を発展して小地域型式を冠するかについては今後の検討課題としたい。

山梨県の後期弥生土器については中山誠二が中部高地型櫛描文土器と東海東部系土器が混在、融合する土器様相を「金の尾式」と型式設定している。私は後期前葉に「佐久系箱清水式（岩村田式）」類似土器・土器敷き炉の存在、住居・墓の形態の類似などから佐久盆地から甲府盆地への集団移住を想定（小山 2017b 2018 2019）しているので「金の尾式」は「岩村田式」の影響下に成立したものと考えている。

「金の尾式」は太平洋沿岸の静清平野、足柄平野でも出土している。甕しか見つからない太平洋沿岸の「金の尾式」の在り方について、私は日常生活のすべてを持ち込んだ移住は想定しがたく、その目的は木器や海産物の交易にあったと推察している。

- 小池岳志 2010 「諏訪が湖南地域の後期弥生土器」『中部高地南部における櫛描文土器の拡散』山梨県考古学協会
柿沼幹夫 2015 「北川谷遺跡群編年と岩鼻・吉ヶ谷式土器との編年比較対象」『列島東部における弥生後期の変革』西相模考古学会
飯島克巳 2015 「樽式土器文化の変遷」『第23回特別展 ゆくものくるもの』かみつけの里博物館
小山岳夫 2018 「南を目指した佐久の弥生人」『山梨県考古学協会誌』第26号
小山岳夫 2019 「「南を目指した佐久の弥生人」から集団移住を考える」『弥生時代における東西交流の実態』西相模考古学研究会・兵庫県考古学談話会合同シンポジウム予稿集
大木紳一郎 2019 「群馬県北部吾妻川流域の後期弥生遺跡について」『研究紀要37』群馬県埋蔵文化財調査事業団
小林眞寿 2019 「第5章まとめ 第4節頭部「T字文」施文甕について」『西一本柳遺跡XXII』佐久市教育委員会

7 結語

表1の畿内様式との並行関係については直接的なつながりがないものの、森岡秀人の庄内式の実年代を推定する論文から推察した。

今回は時間の制約があり、神津猛資料の図化がかなわなかった。いずれ図化して補遺を表したい。

森岡秀人 2018 「倭国形成過程と庄内期開始年代論争をめぐる鼎談2017」『古墳出現期土器研究』第5号

お世話になった方々に多謝（順不同 敬称略）。中尾弘喜、桐原健、町田勝則、村田健二、堤 隆、小林眞寿、尾見智志、矢島宏雄、翠川泰弘（故人）、平林大樹、藤沢平治、羽毛田伸博、篠澤明剛。